

嬉 望

第 13 号
平成 25 年 12 月 19 日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



改善プランに着手!

去る11月8日(金)、二年生

によるインターンシップ報告会が開かれ、それぞれの現場で得られた事柄、改善プランにつながる視点、一年生への送り送り事項などが報告されました。

「現任教に訪問したが、想定していた状況とは異なる場合も多かった。現場は生き物であると感じた。」との感想がもつとも印象的で、一年生には有益な情報となりました。

一年生への申し送りとして、「自分の課題意識を明確にして訪問した方が、ベクトルが定まってよい。とは言え、あまり間口を狭めずに、幅広い情報を収集してきた方が、改善プランの糸口がたくさん見える。」と



の助言がありました。

さらに11月17日(日)には、先のインターンシップ報告会を踏まえつつ、学校・教育行政機関改善プランの中間発表会が実施されました。そこでは指導教官から、次のようなアドバイスがありました。

①様々な切り口があるので、全面展開か、一極集中なのかにしばって論を展開する。

②持論によるプラン遂行上想定される障害に対する手だてを講じておくことが重要。

③着眼は大局的であること。二年生にとっては、ここからが学びのまとめにあたり、正念場となりそうです。



一年生改善チャートの発表
学校組織マネジメントと学校評価
11月21日(木)

一年生が「学校組織マネジメントと学校評価」の授業で各所属校の改善チャートを作成し、その発表会を実施しました。現時点までの学びを総動員し、三年間という限定的な期間での改善プランを策定する力を高めるのがねらいです。

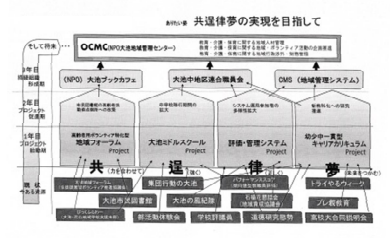
各々の着眼点に基づく独創的なアイデアが披露され、活発な意見交換が行われました。担当の浅野先生からは、

①何を軸にするか決めること。
②『ありたい姿』とのギャップをどう解消するのかを考える。
③最初に組織ありきではなく、取組内容にふさわしい組織を編成することが重要。

この助言をいただきました。これは、来年実際に改善プランを策定するときだけでなく、今後の課題研究等にも活かしたい視座です。

この助言をいただきました。これは、来年実際に改善プランを策定するときだけでなく、今後の課題研究等にも活かしたい視座です。

学部授業での貢献



作品の一例です。

学部の「学校経営論」(金曜第一限)の授業では、本コース一年生が中心となり、各地方の特色ある取組を学生たちに紹介しています。また、学部生に経営の側面から、経験を踏まえたアドバイスをしています。

さらに、「学校教育法制論」(四回生 火曜第二限 御厩先生担当)では、教育法規の専門科目で発表したケース・スタディを学部生にも分かりやすく解説する取組が始まります。

養成段階での現職教員の活用が、本学の強みです。



ゲストティーチャー情報

井上正允 先生
カリキュラムの開発と学校の特徴づくり
11月21日(木)

前 佐賀大学教授 井上正允(まさちか)先生をお招きし、「算数・数学カリキュラムから見た日本の学校教育の課題」と題して講話をいただきました。井上先生は、筑波大学附属駒場中・高等学校で長らく数学教育に御尽力なさいました。

講話では「教員の本懐は、授業づくりと学級づくり。」と話され、教員としての基礎に立ち返り、学校の本質的な機能を回復させることの重要性に触れられました。また、昨今のドリル学習にも警鐘を鳴らされ、議論の重要性を力説されました。

「段差をなくす」ことで、子どもたちの自ら学ぶ力を失わせているのかも知れない...。教員は、学校教育の中で生起することを届け、地域課題を見抜ける力量が求められます。



貝ノ瀬 先生
教育行財政の制度と運用
 12月2日(月)

市町の教育行財政リーダーの知見に学ぶため、三鷹市教育委員長 貝ノ瀬 先生をお招きしました。先生は三鷹市立第四小学校長、同市教育委員会教育長等を歴任され、昨年10月からは、同市教育委員長として御活躍中です。主に「三鷹市学園構想」の着想についてお話しいただきました。

「学園構想」は、三鷹市立第四小学校での取組にさかのぼります。「体力やたくましさに欠ける児童」「多忙な先生方」…こうした状況を打破するべく、保護者や地域から「教育ボランティア」を募集。当初は教職員や保護者から抵抗があつたようですが、丁寧に説明を重ね、最終的には授業支援に地域人財が参画します。

04年、教育長に就任されると、第四小学校での取組をベースに、学校運営協議会と小中一貫教育を同時に全市規模で実施する、「三鷹市学園構想」への取組が始まることとなります。

「基盤を作って施策を打ち、スピード感のある問題解決ができるのが、リーダーの資質。粘り強く、したたかであれ。また、新た



なことを始めるには、根拠が必要。政策論ではなく、客観的な教育論を。誰にでも分かる説明を。」と貝ノ瀬先生。私たちが将来果たすべきミッションだと感じられ、身の引き締まる思いでした。

読売新聞東京本社
早乙女事務局長・石山課長
教育法規の理論と実務演習
 12月3日(火)

N I S M (Newspaper In School Management) つまり、学校経営への報道活用を、授業で演習しています。これにちなんで、読売新聞東京本社から、早乙女事務局長と石山課長が授業の見学に来られました。いつもはメールのやりとりで行うNISM資料の投票(俳句の句会のような互選会)を、今回は、お二方にも加わっていただき、輪読で実施。他誌をモチーフにした作品にも票を入れられる姿に「ジャーナリスト魂」を感じ、一同感激しました。読売新聞では、教育分野での

様々な新聞活用法を提案されており、「今後も、多角的な活用を」と呼びかけられました。



HLC 夜間クラスとの
コラボレーション

「教員の社会的役割と自己啓発(夜間・HLC 御殿先生)」では、様々な角度から教員の有り様を俯瞰することを目的とし、多方面の講師による講演を聞いています。昼間クラスの院生(一・二年)も参加しました。
【11月18日「メディアから見た教員」神戸新聞教育担当デスク・編集委員 田中伸明氏】
 学校がマスコミと建設的な関係を築く上での要点等について、お話をいただきました。マスコミは「警察や関係機関の公表前の情報や、あえて秘匿している情報」を、いわゆる『特ダネ』として重要視する傾向にあり、『特ダネ』を出さないことが、危機管理上のポイント。

「子どもの利益を最大限に尊重し、『正義を手放さないこと』を大切に。」との田中デスクの言葉を、深くかみしめました。



【11月25日「経済界から見た教員」関西経済連合会労働政策部長 長谷川裕子氏】

企業人育成における大学との連携のあり方について、お話をいただきました。企業人として何が必要か、気付き機会を大学で設定すること、単一大学では開設できない学科や絶滅危惧の学科等を経済界としても応援すること、やはり、大学と企業がエコノミの関係を築くこと、等について述べられました。そして、企業人に必要な要素を、①自ら考え抜く力、②相手の立場を理解する力、③ツールとしての英語力、④他人に負けない専門分野、⑤失敗を恐れず粘り強くチャレンジする根気とされました。人材育成において大学の果たす役割は、ますます大きくなっています。



【12月9日「取材・執筆・編集のワザ」読売新聞社大阪本社編集委員 平井道子氏】

いかに相手に伝わりやすい文章を書くか、そのコツについてお話しいただきました。もともと大切なのは、「結論から書くこと」。学校で習う手法は、伝統的に結論が後回しになりがち。詳細や経緯は、後ろに回した方がスッキリすると、平井編集委員。また、一文を短く、主語・述語の距離を離さず書き、誤解を防ぐのも大切。インタビューのコツについても教えていただきました。
 ①事前の準備が8割を占める。
 ②「はい」「いいえ」で答えられない質問を。
 ③予想外の回答を大切に。の3点がポイント。文章を生業とする私たち教員にとつて、今すぐ活用したい内容が満載でした。

